

「不登校に関する教員対象調査」の中間集計（12/6 現在）について（概要）

令和6（2024）年12月23日

教委事務局教育政策課

1 調査の目的

不登校の児童生徒や保護者との関わりの中で教員が課題と感じていることや、各学校における取組状況等について調査することにより、今後の不登校対策の充実に資する。

2 調査期間

令和6年11月～2月

3 調査対象（2,638名）※括弧内の研修は12/6現在未実施

主催者	対象者職名	研修名	受講者数
栃木県総合教育センター	教諭	初任者研修、（2年目研修）、3年目研修、5年目研修、（中堅教諭等資質向上研修）	2,010名
	養護教諭	新規採用研修、5年目研修、中堅研修	60名
	教頭	新任教頭研修、2年目研修	328名
宇都宮市教育委員会	主幹教諭・教諭	（中堅教諭等資質向上研修）、教職20年目研修、（キャリアマネジメント研修）、宮・リーダー研修	154名
高校教育課	教諭	令和6年度県立学校生徒指導連絡協議会	86名

4 回答状況（12/6までに実施した研修の受講者1,793名中750名（回答率41.8%））

（名）

	小学校	中学校	高校	特別支援学校	合計	教職年数	小学校	中学校	高校	特別支援学校	合計
教諭	276	130	94	33	533	1～2年	52	22	2	1	77
養護教諭	3	2	2	0	7	3～5年	183	91	70	24	368
主幹教諭	1	2	1	0	4	6～10年	18	9	8	1	36
教頭・副校長	113	54	33	6	206	11～20年	19	4	9	4	36
合計	393	188	130	39	750	21～30年	37	23	18	4	82
						31年以上	84	39	23	5	151

## 5 結果概要（主な質問項目・選択肢を抽出）

- 関わった児童生徒が休むようになった（休みがちになっている）きっかけとして特に多いと感じるもの（3つまで）
  - ・「友達との人間関係」が5割程度と最も多い。
  - ・次いで、「生活リズムの乱れ」が4割程度いる。
- 不登校（傾向も含む）児童生徒や保護者と直接関わって感じた課題
  - 【児童生徒】
    - ・「性格や精神状態に応じた接し方や信頼関係の構築」が5割程度と最も多い。
    - ・「登校や別室を促すタイミングや程度の判断」「保健室や別室利用の許容の程度の判断」「校内や教室に入ることを拒む子どもへ促す程度の判断」が3～4割程度いる。
  - 【保護者】
    - ・「勤務時間内の保護者連絡や家庭訪問ができない」が4割程度いる。
    - ・「家庭連絡の適切な頻度・方法」が3割程度いる。
- スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの活用に関する課題
  - 【スクールカウンセラー】
    - ・「スクールカウンセラーの来校日が少ない」「本人等に利用の意思がない」が3割程度いる。
  - 【スクールソーシャルワーカー】
    - ・「スクールソーシャルワーカーにつなぐ場面が分からない」が3割程度と最も多い。
    - ・「専門性が分からない」「スクールソーシャルワーカーの来校日が少ない」「本人等に利用の意思がない」が2割程度いる。
- 児童生徒が相談しやすい環境づくりに関する課題
  - ・「教職員が多忙」が5割程度と最も多い。
  - ・次いで、「相談したいときに、スクールカウンセラーに相談できない」が4割程度いる。
- 不登校児童生徒及び保護者の対応における関係機関等との連携の実施
  - ・「スクールカウンセラー」が9割程度と最も多い。
  - ・「スクールソーシャルワーカー」が6割程度いる。
  - ・「市町や県の福祉機関」「医療機関」が2～3割程度いる。